

陸自駐屯地紹介シリーズ 第46回

歴史今もなお 金沢駐屯地

第14普通科連隊 他

駐屯地シリーズ編集委員会

はじめに

今回、金沢駐屯地を取材した。かつて歩兵第7聯隊が日露戦争旅順で聯隊長以下3千名近い損害を出したことを『郷土部隊百選』で読んだ記憶があるので、この地の部隊が捧げた血潮の歴史が現在どのように伝えられているか知りたいと感じたのである。

金沢駐屯地へ取材の申し込みをしたところ、意外にも婉曲な「断り」を受けた。連隊長兼ねて駐屯地司令の離任式が予定されている当日に当たるとのこと。しかし「それこそ願ってもない絶好の取材目標」であった。陸軍の先輩方にも聯隊長とは格別の存在であったろう。その離任の日を紹介したいと申し述べて、たつての取材をお願いした。ご了解を得たのみならず、当日は離任される連隊長にも時間を頂けると信じられないような回答を頂いた。当日は行事や、挨拶の来隊者でさぞご多忙なところを、借行社へのご好意と身にしみた。

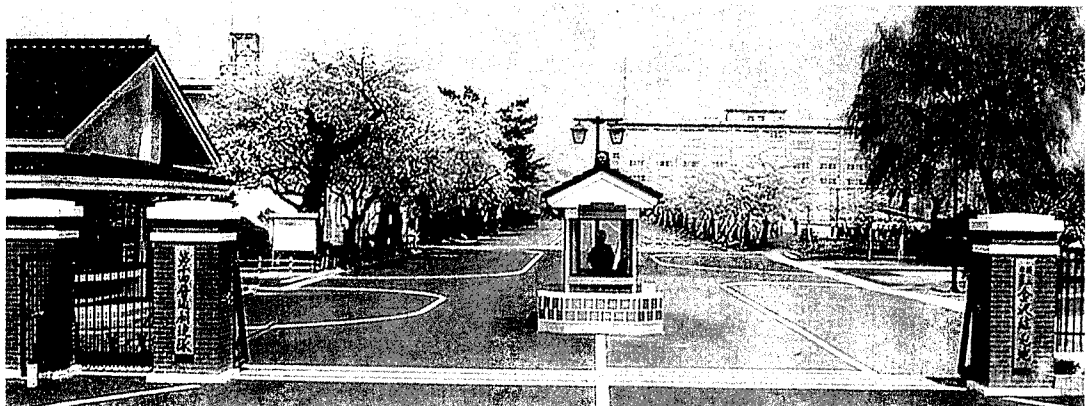
「金沢」描写

今回は土地の予備知識なく自分の目や耳で感得する方法を執った。空港で貰った観光資料によれば小松空港は国内各地からソウル・上海・台北、更に貨物便ではあるがルクセンブルグとも結ぶ便があるとのこと、東西への鉄道路線はもとより、北陸自動車道が繋がっていることも書いてあった。

金沢駅前立って街並みを眺めると、駅から走る一本の広い道、その両側の広い歩道、道路から少し奥に引込んで並ぶビル、極彩色の看板など何処にも見られない明るいうす茶色の街路と路面、ビルの外壁さえも同系統のページユで占められており、更に電柱が何処にも見られない光景が心を打った。この街並の風格は野放図に放つておいて出来るものではあるまい。十分練った都市計画と、責任者の強力なリーダーシップと、市民の心からの賛意がなければ生まれまいであろう。観光案内所に向かった。客足の鎮

まった時刻のシティホテルのフロント並の雰囲気があった。資料を受け取り町の取材計画を練り直すのに駅舎入り口にある小さなカウンターだけの喫茶店に入った。そこで玉露と品の良いワラビ餅を味わった後、手に入れたリーフレットを開いた途端、店番の女性がノートを覗き込んで「どんな所をお望みですか」と聞いてきたのである。「金沢の文化に触れたいのです」直ちに反応があった。「それなら県立能楽堂や近代美術館が宜しいですね。町を愛する市民に触れるのは真に快いものである。助言に従うことにした。

金沢城公園、兼六園、この一帯には博物館、美術館、公会堂など文化を担う施設が並んでいる。その一つが県立能楽堂である。公園の中の樹木の中に時を経た様式の元第9師団司令部、借行社、県立能楽堂が並んでいた。いずれも人影はない。休館日かを確認のため能楽堂事務所入り口に廻って声をかけると遠来ということ以案内して頂けることになった。一間ほどの廊下があり、その壁に表、扇、装束などが展示されていた。由緒書きが掲げられ、色調に年代経過の寂び(さび)がある。二階の収蔵庫には更に衣装などがあるとのこと、残念な事に能楽協会所有物で勝手に鍵を開けられないとの事であった。能楽堂内部について説明を受けた。



金沢の能楽は、藩政時代から隆盛を誇り藩主ばかりでなく家臣、町屋衆にも愛されていた。維新後一時衰退したが、その後篤志家の尽力でたてなおされ、現在は「加賀宝生」として能楽界で重きをなしている。この藩は家臣の俸禄米借り上げや、年貢米等の苛斂誅求による領民困窮の痕は見られない。それ故に、金沢の歴史・文化界で能楽が工芸の頂点に立つ総合芸術の位置を占めて根をおろして輝き、今日の金沢市に漂う気品の素となっているのではと愚考したところである。

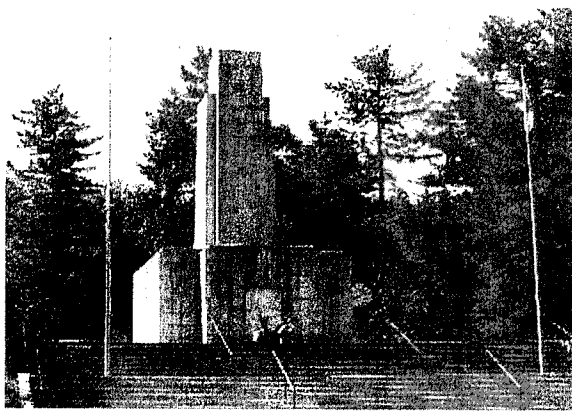
次いで県立金沢美術館を見学した。もし時間があれば一日をかけて鑑賞したいと思った。加賀の文化と云えば造園、建築、絵画、陶磁器、漆器、織物等誇る分野は多岐に渉るが、加賀料理、祭など風習に於いても素晴らしいようだ。また野田山一帯で見られる盛大なお盆行事がある。展示の中に、陸軍墓地の写真を見たまま宿に向かった。

### 陸軍墓地参拝

翌朝は4時過ぎには目が覚め、陸軍墓地に廻らなかつたことがどうにも心残りだったので部隊訪問に先立って参拝することにし、5時になってタクシーを依頼した。運転手に行き先を伝えた時、物問いたげな顔をされた。夜が明けて間もない墓参が不審がられるのも無理はあるまい。陸軍歩兵第7聯

隊を始め戦没者の墓にお参りすることを述べると、すぐさま返事が戻って来た。「私は戦争は厭です。だが国は守らなければならぬ。そして戦死した人のお墓は大事にしなければいけないと思います」。更に続いて「私の子供はイタリアで仕事をしています。その子供が日本ほど良い国はないと言います」。決して筆者に阿る言葉ではなく、汗を流して働き、平和を希求し、国を愛する純朴な日本人の姿があつた。

陸軍墓地は入り口に僅かの上り階段があり、それを上ると都会の小学校グラウンド程の広さの芝生が植え込まれた墓苑があつた。早朝のことで人影はな



い。広い地積の右端に一段と高い石段が築かれ、その上に高い「忠魂碑」が建てられている。その右側にやや小型のそれぞれの戦役毎の7基の石碑と、その右側には数十の石柱が立っている。

参拝した筆者に語りかける声が聞こえて来るような気がした。光景が浮かんで来た。日露戦争旅順攻撃で歩兵第7聯隊が第3軍の先頭に立って盤龍山の急峻な坂を越えて突撃をかける様子である。場面は進み、旅順を陥した後、勝ち鬨を上げる将兵の中に、百人前後に減ってしまった開戦時からの第7聯隊の将兵が挙げる声も洩れるばかりの雄叫びを想像した。勝利を喜ぶよりも先ず冥界から見守って呉れた亡き戦友達へ届けと云う勝利の報告の声であつた。更に進んで戦捷を得た後の将兵の故郷金沢の兵營の光景を思い浮かべた。3千を超える箱が白布に覆われ、兵士に抱かれて兵營に帰る姿、道々迎えるのは戦没者の老いた父母、妻や子、声を立てる者は誰もなく、ご遺族の方々が辛うじて身を支え得たのは「お国のために命を捧げた」と自らに言い聞かせた言葉だつたのだろうか。

### 金沢駐屯地

駐屯地はJR金沢駅の南南東約5kmの場所にある。戦没者墓地や前田家の墓地がある野田山は指呼の距離であ

る。この地は明治45年に野砲兵第9聯隊兵營が築かれ、昭和25年警察予備隊発足に伴い駐屯地が開設された。

ここに駐屯するのは

第14普通科連隊、

第10後方支援連隊

第2整備大隊第1普通科支援中隊

第306基地通信中隊金沢派遣隊

第306会計隊 である。

駐屯地正門に着いたのは、6時半を少し廻つた頃で、中では若い隊員が営庭清掃に皆忙しそうに立ち働きの、手を抜いている者は一人として見あたらない。本日の駐屯地司令離任のため特に念入りの清掃であると想像した。正門から真っ直ぐにメイン道路が走り、すぐ道の左側に警衛所、続いて隊舎が並び、営門右側警衛所に対面して道路の右側には体育館、続くやや高い壇上にグラウンド、道路の突き当たりには6階建ての隊舎があつた。

入門手続きを終えて隊内に十数歩、道の左側に庭園があつた。説明板にはこの築山を日露戦争激戦地で歩兵第7聯隊の勇戦敢闘の地「盤龍山」に見立てて「精神伝統」継承の庭としていることが書かれていた。読み進むほどに休全体が熱くなる高揚が起きた。「金沢部隊訪問の目的の一つは陸軍墓地参拝とこの盤龍山の庭で達せられ

る」と確信したのである。

「盤龍山由來」(原文のまま)

「時は明治三十七年日露戦役にて我が第九師団は乃木將軍の指揮する第三軍に属し旅順攻撃戦に加わり盤龍山を攻撃した。盤龍山は東鶏冠山、爾靈山(二〇三高地)と共に旅順要塞の核心となり難攻不落の堅壁であつてその戦鬪は惨烈を極めた。

我が第九師団將兵は八月十九日第一回総攻撃以来周囲の高地よりする雨の様な敵弾の中を山上の敵陣に向かつて突撃につぐ突撃を繰り返して死傷者は急激に増加した。

第七聯隊長大内大佐は軍旗を先頭に自ら「我に続け」「北陸健児進め」と突撃隊の最先頭に猛進し機関銃弾二十四発を浴び壮烈な戦死を遂げ大隊長中隊長等殆どすべてを失い屍は地隙を埋めて山となし血潮は流れて河となしたが我が精銳は戦友の屍を乗り越え遂に盤龍山巔上に鮮血の軍旗を高々と翻した。その不撓不屈忠報国の精神は「盤龍山精神」となつて今もなお北陸健児の胸に長く生き続けている」

広報班で室長木山博史、尉陸自四他の方々から資料・写真を見せて頂きながら司令表敬の時間を待った。

司令表敬

「敬虔な祈りを捧げて」

司令室に案内されて挨拶した。当日

までの第14普通科連隊長兼ねて金沢駐屯地司令は正木幸夫1佐陸自84U東京大學である。離任式の直前、表敬の時間をお願いした事を先ずお詫びした。司令には日焼けした顔でこやかに応じて頂いた。挨拶草々筆者から、金沢駅頭での気品ある印象、能楽堂に見た金沢の奥深い美の総合、そして靈氣溢れる陸軍墓地を参拝して来たことを申し上げた。たちまち反応があつた。「今年

の1月4日の訓練始めには連隊全員が約25kmを走つて陸軍墓地を参拝しました」。聞いて取材の本能が湧き、思わず腰を浮かせた。「その時の写真ありますか」。広報室長が横から「あります」。あとで広報室に戻つて見た写真は、普通科職種(歩兵科)を示す深紅のマフラーに首元を引き締め、戦闘服、肩つり弾帯、戦闘長靴の隊員達が整列して慰霊碑に対しての姿であり、中の1枚に、脱帽し白い大輪の花を捧げ持つ連隊長の姿があつた。困難に殉じた郷土の先輩方への冥福の祈りと、国防への献身の誓いをこめたのだろうか。この写真は是非陸軍時代の先輩にお見せしなければと感じたのである。(表紙裏)

「郷土の協力を頂いて」

次いで、離任にあたり部隊と地域との関係についてお尋ねした。「心からの支援を頂いている」との総括に始ま

り、幾つかの団体の名を挙げて頂いた。先ず金沢駐屯地協力会、防衛基盤の育成を図り各種行事の支援、隊員に対する激励を行つて頂く18人の個人と84社の法人からなる団体である。この団体の会長角間俊夫氏には、自衛隊、消防、警察等身命を賭けて任務に従事する組織に支援を頂いているとのことであつた。

第2に金沢自衛隊友の会の特色について触れたい。今から30年ほど前の自衛隊を取り巻く世情は荒廃し切つていた。安保改訂を巡り「反対」のデモが懸けられ、正門を封鎖された例も稀ではなかつた。金沢でも、京阪神地区から動員された労組、全学連も交えて押し寄せ理不尽な罵倒を浴びせていたらしい。これに決然として立ち上がったのは昭和45年発足、現在会長上野雅司氏以下24名の「金沢自衛隊友の会」である。「我々を助けてくれる自衛隊が理不尽極まる誹謗に対して立場上何も出来ないならば我々が自衛隊を守る」と活動を続けてきた。その活動の詳細記述は控えるが部隊にとつて心からの支えと感じたに違いない。

3番目に「獅子の会」について触れたい。元幹部自衛官150名を会員とし、

北陸地方の住民に対し国防と自衛隊の重要性を訴える活動を続けている。現在会長は元業務隊長龍岡隆昭氏で、自

衛官時代に身につけた専門知識を最大限に駆使して活動している。

最後に「女性さくら会」について述べたい。女性の立場から防衛思想の普及に努めており現在は会長神谷すみ子氏以下個人会員78名が活動している。女性の細やかな心と華やかさのある慰問激励は隊員の心に潤いを与えてくれることであらう。

「むしろ助けられている災害派遣」

災害派遣について触れてみた。「郷土を守ることは当たり前です。むしろ助けられているのは我々の方です」。その意味を悟ることができたのは表敬



を終えて広報室で過去の災害派遣のピン・アップ写真をみてであった。炊き出し支援を行っている隊員に混じって地域の婦人たちがジャガイモの皮むきに加わっている写真があった。笑顔に充ちていた。退官後自衛官生活を振り返った時、災害派遣出動の経験は実に鮮明な記憶となる。被災者の笑みの中で働いた記憶となれば長く心の支えとして残るに違いない。

「脅威の兆候」

警備隊区の特性は長い海岸線と原子力発電所や石油備蓄基地等重要防護施設の集中である。これらに対する脅威の兆候は木造船や兵士死体の漂着やスパイ活動の兆候があった。これらを一覽表に纏めた資料は大いに国民に警鐘を鳴らし自覚を促す事であろう。

離任式が午後迫った連隊長表敬に予定以上の時間を頂いてしまったことは誠に申し訳ない。幕僚諸官は最後の報告や指導受けの順番でやきもきしていたはず、お詫びしなければならぬことであった。

隊内風景

隊内を巡り見るため本部庁舎を出て、営庭で休憩中の多数の隊員の中に今お会いした連隊長が居られるのに気づき黙礼を送ったところ歩み寄ってこられた。案内の広報室長がこれから駐屯地内を巡ることを報告されると多忙

な中にかかわらず手短かに幾つか説明された。隊内メイン道路に沿う桜の幾本かは日露戦争勝利の記念として植えられたものであること、舎前に駐車している人員装甲車他数両は出発準備を終わり、事が起これば地図情報など最小限の追加情報を得て先遣隊として直ちに発進する為の車列であること、これに乗車する要員は恒常業務にも戦闘服をつけて従事していること、生活隊舎入り口には「練心館」という看板を掲げ日々の励みのところとしていることなどを伺った。

連隊長と別れ警備所の向かい側体育館の裏手に回ると古い木造建築の倉庫があった。陸軍時代の厩舎であり、そのしつかりした建材は今も堅固であった。更にその先には煉瓦の色も鮮やかな倉庫があった。陸軍時代の雨天馬術訓練場であり、柱を使わず広い馬場を覆って天井を支える梁など古い時代の建築技術に感嘆したところであった。

更にすすむと駐屯地敷地の奥に当たる所に植え込みに囲まれた一角があった。駐屯地の聖域「殉戦者慰霊碑」である。碑に続く砂利道を2、3歩踏み出したところで砂利に熊手の目が立てられているのを目にして思わず歩みを止めた。誰方かの参拝に備え、心を込めた清掃作業が窺えたのである。新着任の駐屯地司令は何よりも最初にこの

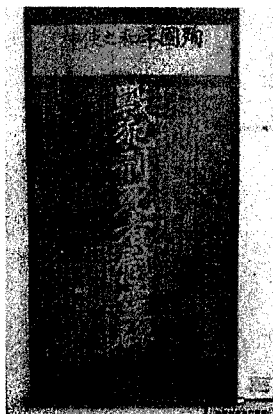
慰霊碑に参拝することになっていふこと、以降は砂利道を外し、脇の土の上を歩いた。広報室長に「道の上を」と勧めて頂いたが、応じられるはずはない。ここを清めた隊員方は「新しい連隊長に歩いて頂く」と心を込めたであろうからである。路側を進み参拝した。

続いて駐屯地で最も高い6階建ての生活隊舎「練心館」の屋上に出た。金沢市内が一望出来た。北から西に視界の彼方まで広がる市街地が望めた。南東から北西約2 km程に犀川が見え反対側の南西に幅約2 km奥行き1 km高さ175 mの野田山が見えた。遠い異郷の地にある縁のある人々が懐かしむのである。金沢の景観があった。景観には詩情があった。

史料館、衝撃の展示物

待機時間を利用して広報班引地曹長に案内してもらい駐屯地史料館を見学した。この資料館は「尚古館」と名付けられ、かつては将校集会所として利用されていたが百年後の今も風格を保ってそのまま利用されているものである。館内は「旧軍コーナー」「自衛隊コーナー」「国際貢献コーナー」に分けられている。数多くの展示物があったが中に一点、強烈な印象を受けた掛け軸があった。小松市に近いある町の元町長村上榮寿氏が自ら筆を執り

自ら槌を振るって鑿で刻み、小松市内那谷寺に建立された慰霊碑の拓本である。刻まれていたのは、今次大戦終了後に汚名を着せられて刑場に消えた19名に及ぶ方々のお名前と辞世、碑は4年の歳月をかけて完成させたという。額に汗を浮かせ力の限り槌を振るった村上氏の視線の先にあったのはなにか。よく目にする拓本は黒い墨で心落ち着きに導くが、この拓本は朱墨で執られて筆者は或いは「血潮の色」の意味を込めたのではと激しく心をかき乱された。日本人が絶対忘れてはならない歴史上の痛みを語る展示物と感じたのである。



駐屯地司令離任式

1県1駐屯地の連隊長兼ねて駐屯地司令が離任交代する場合、その前後はかなり多忙なことは容易に想像出来る。後任者へ確実に申し送るための作業がある。封印した後任連隊長直接開披の資料もあるかも知れない。在任間公私に涉って厚誼を頂いた関係機関や

個人への離任挨拶先は北陸3県の知事等19カ所に上ったと聞いた。

当日連隊長自らの離任式前に、駐屯地から移動する隊員の離任行事がある。駐屯地全員が集合し転任者が紹介された後、各自花束を抱えて営門前で万歳の声を受けて駐屯地に別れを告げるのである。更に転任者が中隊長の場合には連隊長は離任式に立会い紹介の言葉述べる。その合間を縫って挨拶に訪れる人を応対する。借行社と名乗らなければインタビューの時間は到底頂けなかったに違いない。

そして連隊長離任式の執行官は師団長である。副連隊長山瀬守2佐陸自80が指揮する連隊が整列する中、愛知県守山の司令部からへりで飛来した第10師団長千葉徳治郎陸将陸自77が登壇して栄誉礼を受けた後離任者も登壇して連隊長離任の旨紹介される。その後離任者登壇、師団長に栄誉礼、再び離任者登壇、敬礼の後離任の辞、敬礼の後観閲行進に入る。観閲行進終了後、参列部隊指揮官山瀬2佐以下連隊幕僚と連隊旗は観閲台正面に小移動し敬礼して離任式は終わる。

この後暫時を経て連隊長の離隊行事がある。連隊本部庁舎前からメイン道路沿いに見送りに並ぶ隊員が敬礼する中、連隊長は答礼しながら営門方向に前進する。その後を連隊旗手に捧持さ



れた連隊旗も移動する。連隊長が通過した場所の隊員は列を崩して営門方向に進む。営門やや手前で本部庁舎の方向に正対した連隊長に対して万歳が三唱され連隊長が答礼をする。そして駐屯地を後にする。

離任の辞の要旨を入手した。2年間の充実した時間に対し「ありがと」と明瞭に述べ、郷土を守る誇りを述べ、新連隊長のもと更なる精進強化を希望し、今後も金沢部隊の活躍を見守りたいと結んでいる。短切な中に心の籠った離任の辞であった。

#### 新駐屯地司令着任行事

新連隊長海田1佐陸自82は翌日着任された。従って筆者は取材はしていない。しかしながらOB諸官の心にしみるであろうことを紹介したい。駐屯地到着後真っ先の行事は「殉職者慰霊碑」への参拝と献花であった。記録写真で拝見すると服装が戦闘服であることが、今後の自衛隊の厳しい任務を思わせ、そして連隊長が先頭に立って任務を完遂しようという祈りと誓いを感じ取るのである。

今回、取材に応じて頂いた前連隊長正木1佐、広報室長木山3尉他広報室の方々から御礼申し上げます。またお目にかかってはいないが新連隊長兼駐屯地司令の海田1佐のご健闘をお祈りしたい。 文責 松村興延陸自64